

超音波検査の判読精度を教育体制から保証する

○関根智紀 布施義也 崎山恵理子、木内清恵、
菅澤千賀子、伊東功江、朝田寛 佐瀬正次郎
(総合病院国保旭中央病院、中央検査科)

【目的】超音波検査の判読精度の管理は正確さをとりしめることである。検体検査はサンプルを測定することで管理がしやすいが、超音波検査ではサンプル(フォトサペイ)のみでは不十分である。今回、判読の精度を教育体制から保証して進めたので報告する。

【対象と方法】対象は超音波検査者9名である。方法はこれまでの検査の実施法マニュアル化と文書化の整備に対して、新しい教育展開①手技と判読のリアルタイムレクチャーの導入、②精度を保証する勉強会(1回/週)、③学会等での情報交換とした。

【結果】従来型の実施法マニュアル化と文書化の整備は必要不可欠だが、技術習得の裏付けと権威づけが強く判読精度を保証する一面が足りないと感じられた(7例/9例(78%))。新しい教育展開は、1患者毎のリアルタイムレクチャーが効果を得た(7例/9例(78%))。精度を保証する勉強会は各所見を診断ガイドラインに合わせ全員が共有化するので精度を保てる(7例/9例(78%))。学会等での情報交換はこれらを進める原動力になっている(9例/9例(100%))。

【考察】超音波検査には判読精度が保証される体制を設けなければならない。我々は正確さを取り締まる基本的な3手法を具体的に進めて日常検査への向上に結びつけた。手技と判読の指導は悩んだその場での進めることで見落としをせず正診率を高め医師が求める情報を提供できる。診断ガイドラインに合わせ皆が共有化する勉強会は疾患の有無を確定と除外でき、学会等での情報交換は人に教えられるスキルとなり、判読精度を教育体制から保証するものとなった。今後は到達度を成果とし表現させて、正確さへの検証をルーチン化することが必須と考える。

【まとめ】超音波検査の判読精度を教育体制から保証する検討を進め好成績が得られた。0479-63-8111